

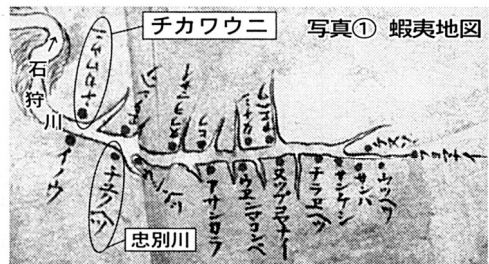
断章 旭川のアイヌ語地名研究

⑪

高橋 基

前回は、近文山のアイヌ語名「チカフニ(cikapuni)」はチカフ(cikap)鳥(ニ)の(鷹)ウン(un)いる(栖む)イ(ニ)所)を統けて呼んだ形で、この近文山のアイヌ語名から音訳して「近文」、意識して「鷹栖」という漢字表記がなされ、村名、地名、地域名、町名と地名になった由来を歴史的背景を述べながら紹介した。今回は、近文山のアイヌ語名「チカフニ」の履歴を見ていきたい。

これまで見てきた文化期の近藤重蔵、間宮林蔵の地図にはチカフニの記載がない。最古の記録は、天保五年(一八三四年)の『松前嶋郷帳』(天保郷帳)の「チカワウニ」で、写真①は天保九年(一八三八年)の



写真① 蝦夷地図

『蝦夷地図』で、天保御国絵図「松前蝦夷図」の写しかと言われる。稚拙な地図ではあるが、今井八九郎が調査に関わった地図と言われ、地名は、『松前嶋

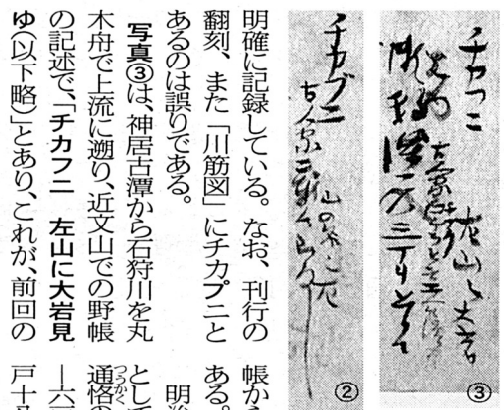


写真 野帳②、③

思ふ形也。」が、近文の由来となった大岩の形容。他の本文は割愛するが、松浦がこの近文山に登り、その眺望を記述しているのは、野帳からみて明らかにフィクションである。

—近文とアイヌ語地名履歴—

郷帳」と同じであるが、郷帳では左岸と右岸の記載がないが、地図では右岸に「チカワウニ」と明記されている。「チユクヘツ」は忠別川。

写真①の「チカフニの大岩」である。松浦武四郎は、この野帳をもとに、報文日誌「再篙石狩日誌」を記し、幕府に呈上した。写真④は、松浦の自筆草稿の添え画で、「チカフニ」の図。本文の表記は、「チカフニ」で、「凡、頂上まで五丁斗、上に岩有、転び落べきかとも

郷帳」と同じであるが、郷帳では左岸と右岸の記載がないが、地図では右岸に「チカワウニ」と明記されている。「チユクヘツ」は忠別川。

写真②は、安政四年(一八五七年)の松浦武四郎の上川調査時に携行した野帳(ライドノート)の『第二番』で、幅八cm、長さ十七cmの和綴し×毛帳である。神居古潭の春志内でシヒラサからの聞き書きである。「チカフニ 山の名也。左 古 人家二軒、今はなし(シヒラサ申口也)「チカフニは、左にある山の名と



写真④ チカフニの図

明治六年、ワツソンの測量に助手として同行した、開拓少主典の平林通格の『北海紀行』では、「チカフニ 一六戸二十九人、「上チカフニ一六戸十八人と、「チカフニ」はコタン名として記されているが、位置の特定は出来ない。明治八年のワツソンの『石狩川踏査図』では、石狩川と忠別川の合流点の現在の亀吉、曙、西地区の位置に、「チカフ子 [tskauni]」と記載されている。

明治二十年内務省発行の『改正北海道全図』では、山名に「チカフニ山」、現在の川端町周辺に地名として「チカフニ」と別々に記載している。前回の近文原野の原典となった地図である。

(アイヌ語地名研究会幹事) ※毎月第一週号に掲載します